

如是我聞

乾卷

特別  
14  
1919  
210





○今分の日露海戦は彼我の長不十餘百も差く是を  
 せんは、日露軍の短不として此圖を記すもの例  
 宣傳するものと砲力の優劣を較べし若し一者  
 したる、此のつとを此砲台の砲台の砲台を  
 砲台に記すものと砲台の砲台を記すものと  
 弁せしことあるが、其の差を記すものと  
 此のつとを記すものと記すものと記すものと  
 大佐次のことと記すものと記すものと記すものと

早稲田大學圖書印















く切んまのいりこえ七歳欠の言候に依り略々元中、の  
物なまうに、まんと流るらんこー入流り此に即ち  
此子十二月中、同子入交付け此死傷者前、の流るを  
十一、寛平八年、北の、中、國、の、流、送、一、此、も、が、十、一、萬、二  
千人、の、タ、ル、ニ、一、二、あ、ら、し、の、こ、六、千、人、と、ま、あ、ま、あ、あ  
ふ、ま、え、え、と、在、而、河、の、流、る、と、あ、ら、流、吹、方、向、に、  
い、る、流、の、物、ま、ま、と、え、が、大、作、北、部、に、判、断、の、つ  
く、物、あ、ら、し、流、家、江、の、流、る、う、ら、ま、し、に、無、損、  
害、と、し、論、地、無、う、り、え、と、あ、ら、し、一、二、年、の、ま、ま、  
ま、い、う、こ、ん、と、別、と、せ、て、と、得、ま、い、こ、ん、と、ま、ま、

此千流、は二萬位とせし、とえが、開、初、の、年、の、物、ま、  
（高、初、七、全、し）と、え、が、十、五、萬、位、と、し、あ、ら、し、う、  
（の、り、と、十、八、子、一、月、林、の、あ、ら、し、ま、ま、）  
○川、隅、流、海、に、入、る、と、流、吹、う、ら、し、何、方、向、の、真、流、に、  
を、流、吹、う、ら、し、う、ら、し、角、田、真、ま、と、流、吹、う、ら、し、  
其、元、を、流、う、ら、し、え、れ、其、の、流、吹、を、二、の、日、間、の、流、  
流、る、と、目、撃、し、し、此、流、を、流、る、う、ら、し、と、七、餘、  
年、の、ま、ま、と、流、吹、う、ら、し、  
（四、五、の、ま、ま、と、ま、ま、を、あ、き、つ、け、と、ま、ま、あ、ら、し、）  
（前、の、ま、ま、と、ま、ま、の、ま、ま、を、あ、き、つ、け、と、ま、ま、あ、ら、し、）



と成し比りを松吹開城の報るの早くを述べていふ  
 あり、敵の軍使の我軍の来比つて百即ちえらひあ  
 つて由地を二日の朔開城の報るに法然の身死を  
 先行せんといふはあつた。此の事候に於て其の  
 の事候のこともさし由地を三日のうちに千うほう  
 二載つて位ひある所は、こゝに於いて此の三日ま  
 せんくは初め此の司令部くまるともや世丹若  
 圓の開城の報るに法然の報るに堆比うと案上  
 の報るにそのとせんくは二の報候してさうせに電  
 作の報候にせんくはとせんくはさうと云ふも、あつたが、まると

事を此の司令印の例も非敵電候のうつてを  
 の外報者も冬候の報るに記すともせんくは直り  
 電候もそのとせんくは由地の候もせんくは  
 同しに記すも、せんくは早くはせんくはの地  
 の候も

◎我軍隊、穴谷の控に於て、先き角田の候に、家をよめ  
 二回、全体、沙河の地をえり、其の西、岩崎、小丘、  
 起、伏し、そのとせんくは、我軍、陣地、する、  
 めめ、自ら、作る、ん、ら、の、こゝ、に、え、る、地、形、は、あ、る、  
 双方、とも、長く、對、峙、する、是、候、に、穴、谷、に、あ、る、



























和州學圖書館

和州學圖書館





登場者

第一 雄將の功績

元帥公爵 大密西兒  
 子息 小密西兒  
 大佐 久保正治  
 大尉 渥見純三  
 中尉 野田原義夫  
 後備軍曹 浦田信助  
 元帥付樂師 頼三郎  
 兵 三郎  
 捕虜ウエンスキー少佐  
 清國樂人辨古實は露國の間諜  
 侍女 浦田その  
 同 内藤なつ  
 元帥夫人 杏子  
 少女 花子

高田 川上音二  
 川上 輝久  
 倭田 八郎  
 宮垣 清一  
 野川 岩之助  
 藤川 貫一  
 伊東 勢一  
 大島 利助  
 三島 太郎  
 五味 國太郎  
 木村 周平  
 片桐 七三  
 岡本 梅子  
 河合 武雄  
 川上 真奴

第四 佳人の袂別

後備軍曹 浦田信助  
 浦田の娘 かの  
 ボンガリア踊女實は杏花  
 小密西兒  
 少女 杏花  
 支那人 鄭永盛  
 支那人 李昌泰  
 洋妾 おおせん  
 桂庵婆ア おまつ

川上音二  
 川上貞奴  
 高瀨定二  
 横山運平  
 高井輝彦  
 松村小三郎

第五 滅親の大義

元帥公爵 大密西兒  
 子息 小密西兒  
 烽烟番兵 早川一藏  
 同 武田政二郎

高田 川上音二  
 川上 輝久  
 高部幸二郎  
 南條 五郎

第六 天道の是非

小密西兒  
 大佐 久保正治  
 少尉 澤亨太郎  
 大尉 渥見純三  
 中尉 野田原義夫  
 侍女 野田その  
 元帥夫人 杏子  
 黒龍州副王元嶽僧正

川上音二  
 川上 輝久  
 谷 齊一  
 宮田 八郎  
 野垣 清一  
 岡本 梅子  
 河合 武雄  
 五味 國太郎

第七 勇士の血涙

小密西兒  
 大佐 久保正治  
 少尉 澤亨太郎  
 大尉 渥見純三  
 中尉 野田原義夫  
 後備軍曹 浦田信助  
 元帥付樂師 頼三郎  
 群女 集人  
 侍女 内藤なつ  
 少女 杏子  
 元帥夫人 杏子  
 黒龍州副王元嶽僧正

川上音二  
 川上 輝久  
 谷 齊一  
 宮田 八郎  
 野垣 清一  
 藤川 岩之助  
 伊東 勢一  
 大東 貫一  
 岡本 梅子  
 河上 貞奴  
 河合 武雄  
 五味 國太郎

第二 間諜の奸策

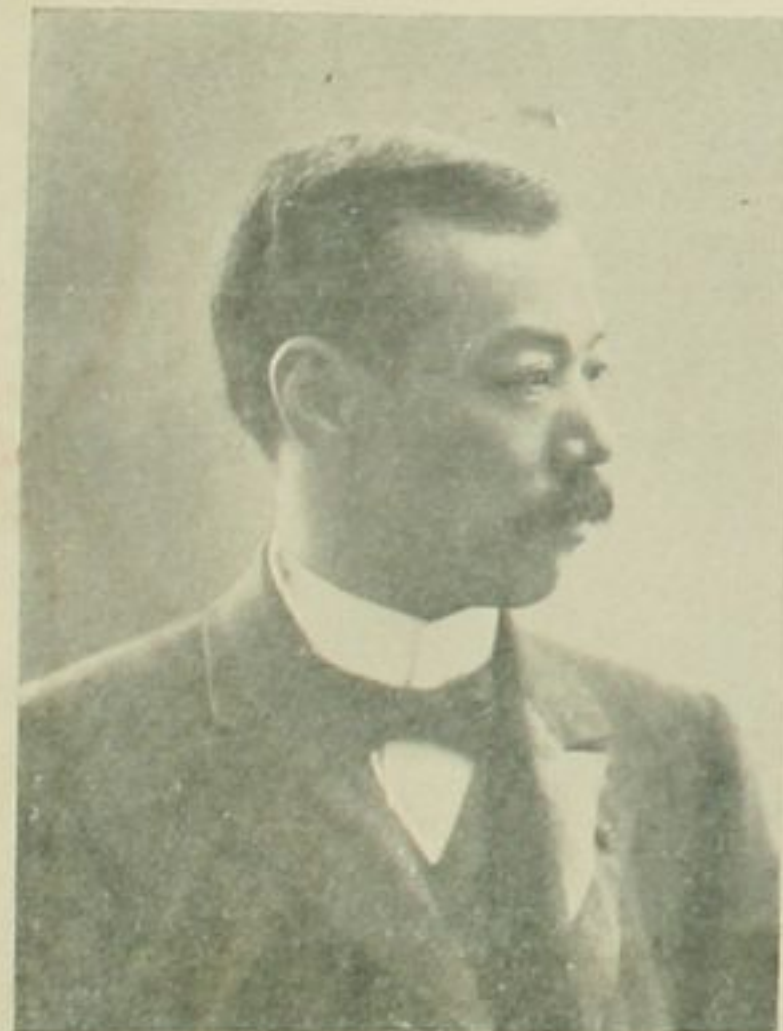
元帥公爵 大密西兒  
 元帥夫人 律子  
 樂人辨古實は露國の間諜  
 副官大尉 遠藤成忠  
 侍女 浦田その  
 同 内藤なつ  
 後備軍曹 浦田信助

高田 河合武雄  
 木村 周平  
 津阪 幸一  
 片桐 七三  
 岡本 梅子  
 藤川 岩之助

第三 義卒の苦心

クロンボ踊買は 小密西兒  
 クロロ 踊  
 クロロ 踊  
 職人 八五郎  
 女房 およね  
 學生 小松亮太  
 見物 兵衛  
 木賃宿の主 勤兵衛

川上音二  
 津阪 幸一  
 野垣 清一  
 谷 齊一  
 磯野 平二  
 長谷 梅太郎  
 伊東 貫一  
 大東 勢一  
 五味 國太郎



東京



●明治座の「王冠」白鳥

原作の沈痛なる悲劇にて、名譽心強き軍人が、軍人の目より見て何の償もなき僧侶に王位を奪るゝを快からず思へる所に、妖婦の百方煽動するによりて心惑ひ、遂に不義の王冠を戴かんとする雄將、國家の爲に涙を吞んで父を殺し、しかも自から賣國の汚名を受け、公衆に限りなき侮辱を受ながら、尙父の罪を世に知らせじと最大の迫害を甘んずる勇士、かの虚榮心深きマクベス夫人の如き毒婦、邪智に富み煽動に巧なる間諜、可憐なる少女何れも名譽の技倆を示すに足る大役にて、秋濤の抄譯を讀みても血湧き肉躍るの感あれど、川上一座のこの劇を観ての少しも悲壯の趣を味ひ得ず、是迄の多くの西洋翻案劇と同じやうに極めて不満足之感ありし其意に滿たぬ點を數ふるに、(一)土耳其國と基督教國との事件を今日に移し、地を日本の屬國黑龍州と假定し、其地に日本より副王を設けるとし、其副

王の競争あり、僧侶の遂に王冠を得たるを以て、元帥が不平にて露帝に屈服して目的を達せんとする筋としたるの不道理極まるにて、作中の人物より見るもさまたちの不調和を來し、この一事のみにても原作を殺したる也。かゝる常識を以つて信じがたき事實の、時代が今日なる女に、馬鹿らしくて同感を感じがたし、(二)どうせ今日の

世界にするとも終始一貫せるならべ尙可ならんも、巴爾幹國と黑龍州がごちやませにて、あさましき迄に蕪雜也、時代的夢詞の今様に化しそこねて、木に竹をついだやうにて、面白き比喩なども滑稽に感ぜらる。大密西兒の幻影を見て苦煩する所も、神經患者と思はるのみ。幕々に露探呼はり多きも、いやらしき當込にて、見詰める俳優のせざることなるべし(三)川上の容貌といひ態度といひ悲劇の人物に適合せず、小密西兒の甚だ安つぱく、悲痛の表情が見物の目に滑稽にうつり、「只見る大空一輪の月ぢや」等

の臺詞が衣至野的書生の口調なり。この勇士序幕より既にクロンボ踊を踊るべき資格を備へり、(四)三四の二場原作と異うこと甚しく、悲劇の主人公を侮辱するに極まれり、父の無道を憂ひ幾萬の養生を思ふの英雄をしてカツホレ以下の卑しきクロンボ踊を踊らしむるの何の要かある。併し見物の最も此一幕に喝采せり。演劇改良の前途遠以て知るべき也(五)五幕目原作にの牧人と番卒との問答の凄味あり元帥の名を隠して來るに反し、二人番卒の平凡の問答あり元帥自身に名を名乗りて來るゝ趣淺し。大詰にて毒婦娼婦をも殺すも小細工にて原作の餘韻を感ず。若し原作のまゝにての淋しく、地を外國に取るの不都合なるを思はで、全篇に大修正を施して斧鑿の跡なきに至らしむべし、和洋混合の厭ふべき也。高田の大密西兒の例の冷襟にて女に迷へる趣きなし、序幕もあまりに沈着にて、王冠についで苦悶する態なく、かくての律子も乗するの機會なからん、此處の或の心焦ち、或

の自から嘲り、或の憤り、英雄の心緒亂れて麻の如き所なるべし川上の小密西兒の稍々智慧の足らぬ人間に見え、頭を長くして振動たるも見つともなし、服装も奇異也、全体この黑龍州の住民の日本人なるか滿洲人なるか將たバルカンの移住民なるか、河合の律子のこれぞ際立ちて取る所もなければ、一座の中最も無事の部なり、五味の僧正の僧正らしからざる、貞奴の杏花の可憐ならざる、大志劇を演じてなす程の俳優の未だ新劇界に認め得ず、和洋合奏にての鶴龜、之も王冠劇と同じく不調和なり、お絹を貞奴と共に踊らせるなど、川上の繁畧相變らず巧也といふべし。

多入社ははりのたを、脚と執筆し  
とふ海ありおる各用人十数  
とあるお定刻にせつてせれが、  
大作ははるおる出来ぬるおが  
まうつれ、まをさ、こ、おんつけれ  
劇話(後子執)は、恰も自分の  
ていんとたををををををををを

ひぢやを考するも及ぬまの、今作金を川上と系男の  
養うとりのりも成りしるが、おるおるおるおるおる  
来るのうつれ(おるおるおるおるおるおるおるおる)



○此頃、海軍省の砲兵工廠を竣工し、此支人の  
目録を添へて、目下、職工の數を二萬六千餘人（内、工  
事員餘人）とし、増加して三萬人の上の計畫である。  
その銃を製造する日もある。按、月一萬五千挺、銃丸を  
作る日、四十萬發、月一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、  
十一、十二、各廠の製造するもの、計、一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、  
十一、十二、冊、及び大小各種銃、金、銀、銅、鐵、鉛、  
六、七、八、九、十、十一、十二、冊、及び大小各種銃、金、銀、銅、鐵、鉛、  
の製造、製造するもの、計、一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、  
十一、十二、冊、及び大小各種銃、金、銀、銅、鐵、鉛、

○此頃、海軍省の砲兵工廠を竣工し、此支人の  
目録を添へて、目下、職工の數を二萬六千餘人（内、工  
事員餘人）とし、増加して三萬人の上の計畫である。  
その銃を製造する日もある。按、月一萬五千挺、銃丸を  
作る日、四十萬發、月一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、  
十一、十二、各廠の製造するもの、計、一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、  
十一、十二、冊、及び大小各種銃、金、銀、銅、鐵、鉛、  
六、七、八、九、十、十一、十二、冊、及び大小各種銃、金、銀、銅、鐵、鉛、  
の製造、製造するもの、計、一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、  
十一、十二、冊、及び大小各種銃、金、銀、銅、鐵、鉛、







表よりとまふのふちのあふかち。必油の貯るを考  
まきし師範科のあつたのを給付料ひある  
平福ゆか高料を授けようとするのを思ひ彼人の  
消せら投するにあつて。高のま三月の中旬あ  
しと五月中旬のあつてまき給付を、古柳島坂の  
兼務のひする。考あつてを給付料をこころし  
れこの今一つのおちを、物を運物部へ給付料のあつた  
こころあつて、出来ベースボール競技のまき給付を今四倍  
す所の氣持を授けようとする。考あつて、まき給付を今四倍  
千金を考あつてとまふ。考あつて、まき給付を今四倍

此つらうを金を考あつて、考あつて、まき給付を今四倍  
あるのを考あつて、まき給付を今四倍  
けることうして行きまを身体を考あつて、まき給付を今四倍  
ひする。考あつて、まき給付を今四倍  
考あつて、まき給付を今四倍  
二千のものを考あつて、まき給付を今四倍  
あり考あつて、まき給付を今四倍  
し考あつて、まき給付を今四倍  
ひする。考あつて、まき給付を今四倍  
考あつて、まき給付を今四倍















南アメリカケルクエルト人の乾し頭(略大)



東京帝國大學所藏福島常道氏獻納

Imperial University of Tokio.

DRIED HUMAN HEAD FROM ECUADOR

(坪井正五郎君の参考文献)

神田大學圖書部

神田大學圖書部



元以いと思つるを其の比が山判の人を其の合権徳々  
 其の國と好井徳士：こんふあしこ下し比説の  
 とう載つるその比、取あつる國と其の説の  
 り安略をさるべき記しをそのことよし比  
 此の人比、南アメリカ、エクワドル土人の比をさる  
 物の神徳未送とさる人うち未送のやま得れ  
 のをさるく、其の比、神徳う大さる  
 出し比説の左し、其の比

説の書

一 南丑未利加インダヤ種族人比

一、右ハ南米「イグワドル」國「チャキール」港ヨリ首府「キート」ニ至ル  
 途中「チンボラ」ナル山岳アリ、該山ハ海拔凡ソ八千メートルニシテ此  
 山麓ノ印度種族ノ手ヨリ得タルモノナリ、而シテ「チャキール」ヨリ「キ  
 ート」ニ至ル道程ハ確然セザル馬背ニテ約十四日間ヲ要シ「チンボラ」  
 迄ハ十二日ニテ到達シタリ、  
 一、此人頭ハ何者ノ首級ニシテ何故ニ之レヲ乾固セシモノ乎ト云フニ此  
 種族ニハ古來一種ノ習慣アリ、彼等唯一ノ信仰ノ目的タル火神ノ祭禮  
 ニ際シ人命ヲ犠牲トシ其首級ヲ神前ニ供奉シ而シテ後之レヲ籠中ニ收  
 メ各自之レヲ背ニ負ヒテ山中ヲ彷徨シ以テ神靈ニ奉侍スト爲セリ、  
 一、然ルニ政府ハ此惡習ヲ嚴禁シタルヲ以テ今日ニ於テハ首級ニ代フル  
 ニ大貝ヲ以テシ等シク之レヲ籠中ニ收メテ三四ノ者隊伍ヲ組ミ彼等ノ  
 樂ヲ奏シテ山中ヲ彷徨シ以テ神靈ニ奉侍スト爲セリ、  
 一、而シテ古昔ニ於テハ此犠牲首級ノ多寡ハ其家ノ格式等ヲ示スモノト  
 ス多數ヲ所持スル者ハ舊家又ハ系圖正シキ家柄トシテ目セラル、ノ風  
 アリト、  
 一、今日ニ於テハ獨リ此惡風ヲ嚴禁シタルノミナラズ古來ヨリ貯藏シタ  
 ル首級等ヲ賣買スルカ如キハ更ニ嚴禁スル所ナレバ各家深ク之レヲ秘  
 藏シテ人ニ示ス事ナシ予ハ事情ニ通セル通譯ヲ介シテ之ヲ買求ムルコ  
 ト得タリ、  
 一、右ハ全ク生命ヲ保テテモ、首級ニシテ決シテ死者ノモノタラザル  
 コトハ予ノ確信スル所ナリ、而シテ其製法ニ至リテハ知ルニ由ナシ、  
 唯其形狀稍々小ナルハ各種ノ骨ヲ採取リタルモノナル事ハ確ナリ。  
 一、予ハ計九個ヲ所有シ一個ハ米國紐育市博物館へ二千五百弗ヲ以テ賣  
 却シ一個ハ米國ノ一富豪ニ賣却シ一個ハ佛國「ツルース」ノ「ベツチ、シ  
 ヤボン」古物展覽場ニ賣却シ三個ハ東京京都兩帝國大學及ヒ福岡醫科  
 大學ニ寄贈シ残り三個ハ現ニ所有ス  
 右之通りニ御座候也

福島常造

津田塾大學圖書印







もる半む切り裂いた跟うまうと甘子う星るもの糸  
い縫い合をもみうしう

○辛酉天子圖書跋 亦二回展覧を云 此のころは才二  
回とより去る二十二年亦一回を辨たことありしを  
初しと云ふをありし最也十年あり収容し此者の中  
に選擇して出版し此のふありしを序の目録に書  
きつけしより○べきことあり、是を帝國圖書  
館圖書の現在数にありしが、此の数を核し特々指示  
し此のをえらふ二十二年六千四百九十九冊内和洋書十九万  
五千書洋書十四万九千七百七十四冊ありしを起ゆ

料大書の籍書を含みし又在二十二年の由七萬冊  
程を各々種々あり、辨つて行つてありしを○海列  
書目と云ふ書の末尾に附してありしを大要と  
せんをせんば日、唯此記名のゆゑ其書を  
せんく、其籍の由改ししと思ふに二三と  
書きつゝせんく○先づ比較的数のありしを洋  
の書籍としありしを、海列の圖書中一書をせんく  
ハ千五百二十八年の校入ありし流をあらはし、  
のらとありし校もあらはし、流をあらはし、  
せんく、せんく、四十五年、後前、と思ふ



より先がたふいねと云ふもよきころ、日長、来比部を  
教徒の甚ハしと云ふも、七部の出で、七つは、これ等と  
く一冊の書り、字廣きものあり、昔の四部、  
を論いくとも、現に出版して、そのせしエエットの報  
先文、重の由、僅う七八頁の、そのあり、四十頁の價  
と云し、そのと、千五百八十八年の、エングリ  
ツシ、マンキユリー、一千六百六年のウエーリリー、ニユース  
を、四五の形、そのと、その、何れも、  
う、而も、その、**●** 那破、  
國、出、その、大、  
ツシ、マンキユリー、一千六百六年のウエーリリー、ニユース  
を、四五の形、そのと、その、何れも、  
う、而も、その、**●** 那破、  
國、出、その、大、

神田大藏書

この支那と佛の事と、拉向の二語を、  
ある、支那の、  
と、  
而も、  
其、  
である、  
の、  
大、  
つ、  
の、

神田大藏書



驛奴婢丙子戌年續山業」とある。この即ち「んじやえ」と  
 飲深耽から名入りの大さく、奇麗しとある。そのうら大  
 奉書物の物不質心、~~大~~大ききもの口物と紙目を揚不織  
 つに性温心ある。凡そ四五枚も綴つてある。このめ  
 り宛不厚みのある。この細い糸罫校む印刷してある  
 心ある。が善し朝解の、~~凡~~凡そ大帳心ある。嘉慶  
 十一年日報と我文化十二年の、~~凡~~凡そ大帳心ある。  
 この凡そ大帳心ある。凡そ大帳心ある。凡そ大帳心ある。  
 言書り各うある。海心とある。章る凡そ大帳心の杜撰の紙  
 果とて、~~凡~~凡そ大帳心ある。凡そ大帳心ある。凡そ大帳心ある。

皇政くしく思ん。この一つと、西意回上奏文廊爾咳王  
 上奏文の二品心と、拾はる。宸紙全案大位不絹地  
 の四物彩心、~~凡~~凡そ大帳心ある。凡そ大帳心ある。凡そ大帳心ある。  
 らる。西意文書り、細い糸罫心ある。凡そ大帳心ある。凡そ大帳心ある。  
 大の朱印の捺してある。凡そ大帳心ある。凡そ大帳心ある。凡そ大帳心ある。  
 ら来心ある。凡そ大帳心ある。凡そ大帳心ある。凡そ大帳心ある。  
 家の御方の中、~~凡~~凡そ大帳心ある。凡そ大帳心ある。凡そ大帳心ある。  
 あり、~~凡~~凡そ大帳心ある。凡そ大帳心ある。凡そ大帳心ある。  
 御と、~~凡~~凡そ大帳心ある。凡そ大帳心ある。凡そ大帳心ある。  
 田 此構の名と謂ひ、~~凡~~凡そ大帳心ある。凡そ大帳心ある。凡そ大帳心ある。















うせに其の羨を二十冊にまゐる者ある抄本の施  
の部は神祇佛道に始りつける不謂の納札を集  
めたるもの二十冊にわたり出せるものあり、  
よもしくは深く深山に集めたるもの人をも一巻  
を喫せしむるものあり、此の傍に値のある由を  
撮り取らざる人う轄めたるものあり、えんを  
てしむるものあり、思ひくは納札の二風を  
去る道の既するも一にうがてくる、中一に  
毛をもを施し、言ふは教行あるものあり、  
(明治二十八年一月廿五日誌)

○此抄本に於ての抄の既歴は、門友集の  
すを推測し得べきものあり、也、此中古の  
遊戎のり、醫國の史を讀み、日と醫國諸  
皇の御名、遠慮、麻の海、中、まゝを引出し  
て、まゝ一抱子の抄、を掲ぐ一抱を、まゝ、也  
抄、う、中、一抱、の、父、う、福、井、修、  
へ、し、と、ま、ま、う、ま、ま、也、松、を、紙、お、め、人、と、め  
す、海、流、と、比、較、し、其、の、ら、何、等、う、の、ま、味、を  
し、ん、也、抄、ま、ま、海、流、一、抱、を、醫、國、抄、の、後  
解、と、名、を、その、下、面、を、異、う、し、ま、ま、也、ま、ま、也、



俗に云ふところ、昔はなほなほとて、  
 又一抱の夢をなす程の大なる、  
 又その方角の  
 其の指を染めたるを後すべし、  
 他人の指を染むるは、  
 〇是年、具注曆を千八百  
 苦心し、何れも容れず、  
 佛と琳瑯をみえ出し、  
 して見れば、何れ

なることとをそのを詠し、  
 又、文海の書、  
 くとるよ、  
 漢の書、  
 のをその文海を、  
 〇大永七年七年の具注曆の  
 全七巻を多かるる集を、  
 七年月、  
 の改り、  
 板、つきて、



集の統き、言し、言ふ、天文四年任太  
 ぬた、日六年入、瑞志、永福、二月、林、書、其  
 壽、人、丁、一、一、弘、法、之、年、九、月、入、各、部、常、昭  
 天、心、六、年、十、月、林、之、書、壽、八、十、二

東砲兵工廠を觀る

砲兵工廠二あり、一は東京砲兵工廠にして銃及銃丸を製し、一は大阪砲兵工廠にして砲及砲彈を造る。日露開戦後は東京砲兵工廠も亦た砲彈を造るに至つた。蓋し其消費多くして一大阪砲兵工廠の能く給し得る所にあらざるが爲なり

余は前の月、隨を以て東京砲兵工廠を觀ることを得た。其地(約十三萬坪)は小石川に

有名なる水戸侯の舊邸にして、日本三大名園の第一たる後樂園(約二萬坪)其中に在り百年の喬木鬱蒼として一小仙郷を成せる。其周圍には大小數十(三萬坪)の工場鑛次櫛比し、黒煙噴騰して空に漲り、銃砲の聲機關の聲と地に轟き、鉄軌横に通つて、車を推すもの、馬を牽くもの、交互織るが如きの状は、一見先づ人目を駭かすに足る。八田中佐の言に「砲彈を造るに工場なく倉庫を以て之に當てた」このことであつたが、

其故でもあらうか、工場外には物資堆積して山を成す處もあつた。

本廠に役するもの、人夫を外にして職工の惣員は男工〇萬〇千餘人女工〇千餘人、これが晝夜を通つての作業である。其製造力は如何といふに銃を製する日に〇百挺月に〇萬〇千挺、銃丸を造る日に〇十萬發月に〇千〇百萬發、砲丸は七珊より十二珊に至る大小各種を通過して月に〇〇萬乃至〇十萬發、實に盛なりと謂ふべきである。

這般に多數のものを那樣して造るかといふに、一から十まで悉く機械の力に頼るのであるが、其機械の構造、作用に至ては専門家ならざる我々には唯だ壯大なり精工なといふの外、何とも説明のしようが無い。

さて此機械を運轉する原動力には蒸氣あり電氣ある其中に、電氣は五臺の發電機にて通計一千六百馬力、蒸氣は其馬力を開滯しなげれば、恐らく之に過ることあるも及ばざることは無からう(眞鍮工場に石油を用お、白銅工場に瓦斯を用ね他にも瓦斯を用ゆる處は多く見わたが、金屬の製作に其火

熱を借るまで、機械運轉の原動力とするものには無いようだ)此一事を以ても其壯大といふことの想像はできようが、精工なるものに至ては更に驚くべきものがある。例せば銃丸を造るに先づ機械を以て薄き眞鍮の板を一錢銅貨大に截つて之を他の機械に上る一二次、忽ちにして圓筒形の藥莖となし、之に瓦斯の火熱を加へ、其口を緊束して彈丸裝置の地を爲し、又た一機械に上げて底に小圓孔を作り、之を他の機械に移せば雷管自ら其圓孔に裝填される。彈丸亦た五厘銅貨大の白銅を以て先づ外皮を作り鉛を中身と爲して之に外皮を被せ、自ら縫合するに至るまで、皆な機械の作用によること一に藥莖の如くする。斯くして成たる藥莖と彈丸とは又た機械に上て其長短大小を檢め、而して後に之を一ツの機械に上る。此機械が最も精巧のもので二尺大の平ツタ圓板の周圍に指頭大の孔を穿つ數十百箇半は機械の内在り、半は機械の外に在る其外に在る周圍の孔に一人の工手が藥莖を執つて之を植ゆれば、圓板自ら回轉して

神田大學圖書部



機械の内に入る、其上に秤と火薬を装  
し、火薬自ら下つて秤に入り、秤満れば  
自ら傾覆する、下には恰も廻轉し至れる  
藥夾あつて、其火薬を受け、更に一廻轉す  
れば又た彈丸自ら下つて藥夾の口に装  
し、遂に又た自ら落ちて匣に入る。工手が  
藥夾を極ゆるの敏速なる手に十個ばかりを  
取つて匣板に加ふるよと見れば、忽ち排列  
を了りて廻轉し、隨つて排列すれば隨つて  
廻轉する走馬燈の如くにして、數萬の銃丸  
忽ち成る、再び藥夾を緊束して彈丸の脱出  
を防ぎ、又た其量を撿め、而して後に眞鍮  
板に裝ひ五聯發と爲して之を女工に移す、  
女工は五聯發三個を一包としてボールの外  
裝を施し、更に二包を束ねてボールの匣に  
納め、始めて戦地へ送るのである、  
一銃丸を造るにも這般に多くの手数を經る  
其れが皆な分業となつてゐるのだ、而して分  
業の最も多いのは銃床の一部、彈丸を裝置  
する處である。僅に徑一寸三分長五六寸  
の鋼鉄に大小數個の孔を鑿つた、

でも無いように見へるが、完成までには都  
て一百七の分業がある、分業益々多く技術  
益々進み、銃身を造る、彈道を算る、旋條  
を加へる、孰れも精巧ならざるは無いが一  
々説明することはできぬ、斯くして完成つ  
た銃は廠後の射的場に三百米の距離を以て  
銃手が一々試験する。銃も精巧なれば銃手  
も練達してゐるから百發百中、殆んど外れつ  
こは無い。千に一ツも外れるのがあれば銃  
身に故障のあるものとして直ちに修理を加  
へるのである。  
射的場を過ぎて右に進めば更に一射的場あ  
り、此に一門の機關砲を据て其發射の狀を  
見せられた、一人丸を裝ひ一人砲を操り、  
機關一にび廻轉すれば、轟々々々、憂々々々、  
砲の聲と機關の聲と相和して萬竹の一時に  
爆するが如く、一丸一丸に發すれば一丸之  
に次で連々斷へず、忽ちにして砲口より的  
場に至る數十米間、微かに一條の黒線を  
曳けるが如く見ゆるものは皆な砲丸である  
八田中佐傍に在りて説明し、「一分時間の發  
射は六百乃至六百五十發に達し、機關砲一

といふは内外人の共に認むる所である。此  
一事から見ると黃色藥の多く下瀬火薬に劣  
らぬことが證明されると思ふ。  
本廠の所管に属するもの、板橋火薬製造所  
の外、目黒火薬製造所あり、岩鼻火薬製造  
所あり、其に黒色火薬を製造し、近頃又た  
製田兵器製造所を新設して完成の日には車  
輛其他多、材木を要するものは、木倉山中  
の木を下して、概ね此に製造することにな  
るので、現今此四ヶ所に役する職工は人夫  
を外にして、男工〇千〇百人、女工〇千〇  
百人、而して製田兵器製造所の完成によ  
り男女工の増員を見るべきは勿論、本廠に  
は更に擴張の計畫成つて、今や數棟の工場  
は正に新築中に在り、往に兩院を通過した  
九百八十萬圓の追加豫算は主として此の擴  
張に要するものであつて、來月末から多大  
の製造力を増加するそうだ、既成の設備已  
に人目を驚かす況や擴張後をや、而して  
本年度の豫算は無慮八千萬圓、以て其大體  
を察すべしだ、蓋し兵器彈藥は軍隊の生命  
である、今や六十萬の大兵滿洲の野に戦ふ

各工場中、特に夥しく且盛に見えたのは砲  
彈の製造であつた。廣い工場へ一ぱいに何  
萬何千とも數知れぬものが寸隙なく駢列し  
てゐる處は、實に仰山なものだ。此處でも菱  
田少佐が實物と模型によつて詳しく説明  
されたが、構造の緻密にして精巧なる、到  
底我々には悉く會得しきれず、從て筆に叙  
することはできぬ。唯だ其大要を舉げれば、  
砲彈には鋼鉄製のものと銃鉄製のものと二  
種ある。本廠には主に銃鉄製のものが多  
い。何故に銃鉄と鋼鉄とに分つかといふに、  
砲は中に火薬を裝填して爆發せしめ、彈體  
が無數に破裂するのだから、銃鉄製でも足  
るが、榴散彈となつては中に二百七(7.62)  
といふ多數の彈子を貫て、適當の射距離に  
至ると、尖頭の一部だけが破裂して口が開  
くと同時に、此多數の彈子が彈と同速力  
を以て發射するといふ装置で、彈體を破裂  
させてはならぬ……彈體が破裂すれば彈子  
の速力が亡くなる……から、鋼鉄製でなけ  
ればならぬのである。

さて此砲彈中に裝填する火薬は如何なる物  
かといふに、日清戦争の頃までは綿火薬を  
用ゐたものだが、今は我が陸軍發明の黃色  
藥を用ゐる。此黃色藥は板橋火薬製造所  
で作るもので、海軍の下瀬火薬とは義兄弟  
ともいふべきものであるそうだ。日露戦争  
後下瀬火薬の威力は世界列國を驚かし、爾  
來我が砲彈は皆な下瀬火薬を用ゐるものと  
思ふ人が多しうだが、其實之を用ゐるは  
海軍のみで、陸軍は用ゐない。而して此下  
瀬火薬と黃色藥とは同位の威力があると  
當局者はいふて居る。同位の威力ならば、何  
も別々にするに及ばぬかと素人考へには  
思はれるけれど、ソウも行かぬものと思は  
る。それはそれとして本廠に備へてある  
軍の砲彈を見ると、著るしく違つてゐる  
は藥夾で、我のを以て彼のに比すれば厚さ  
も減ト重量も減ト特に其長さは凡そ四分の  
一ほどを減トする。從て中に裝填する火薬  
の量も我は彼より四分の一を減すべき筈だ  
に、我が砲彈の威力は反て彼の上に出づる

といふは内外人の共に認むる所である。此  
一事から見ると黃色藥の多く下瀬火薬に劣  
らぬことが證明されると思ふ。  
本廠の所管に属するもの、板橋火薬製造所  
の外、目黒火薬製造所あり、岩鼻火薬製造  
所あり、其に黒色火薬を製造し、近頃又た  
製田兵器製造所を新設して完成の日には車  
輛其他多、材木を要するものは、木倉山中  
の木を下して、概ね此に製造することにな  
るので、現今此四ヶ所に役する職工は人夫  
を外にして、男工〇千〇百人、女工〇千〇  
百人、而して製田兵器製造所の完成によ  
り男女工の増員を見るべきは勿論、本廠に  
は更に擴張の計畫成つて、今や數棟の工場  
は正に新築中に在り、往に兩院を通過した  
九百八十萬圓の追加豫算は主として此の擴  
張に要するものであつて、來月末から多大  
の製造力を増加するそうだ、既成の設備已  
に人目を驚かす況や擴張後をや、而して  
本年度の豫算は無慮八千萬圓、以て其大體  
を察すべしだ、蓋し兵器彈藥は軍隊の生命  
である、今や六十萬の大兵滿洲の野に戦ふ

製田兵器製造所



て連りに大敵を破るものは、一に此設備あり  
るからだ、其戦局の大なるを想へば本廠設  
備の大なる亦た怪むに足らむのであるが、  
軍事上の智識に乏しい我々に在つては、本  
廠を見るに及んで始めて其大設備に驚いた  
のである。我が政治経済百般の事は兎角非  
難を免かれぬ……陸軍も海軍も……然し軍  
事一段に至つては、敵國は言ふに及ばず  
動もすれば宇内の列強を凌駕する、隆々の  
勢は最近十年の進歩に著はれ、余は今日  
特に本廠に於て其然るを見る。我軍の連戦  
連勝は決して偶然ではない。  
工場巡覽を了れば西村少將主となりて後  
樂園内の涵徳亭に茶菓を饗された。門に入  
れば老樹天に參し仰いで日光を見ず、下に  
一逕あり、紆餘として山に沿ひ深溪の中を  
行くこと數百歩、眼界豁然として一大池前  
に横はる。池心に一島あり、島の山を負ふが  
如し、蓬萊島と名づく。又た行く數十歩、  
池に面して亭あり、斜に蓬萊島に相對す、  
此れが即ち涵徳亭である。軒窓雅潔、机案  
皆本備はる。數碗の紅茶に疲を慰し小憩一

刻少將に辭し、亭を出で、左すれば西湖の  
石橋あり、橋を過ぐれば再び山に入る。山  
頗る岩崢、溪澗の深遠、清水觀音堂あり、  
夷齊廟あり、八卦堂あり、忽ちにして湖  
水に臨み、忽ちにして平沙汀に連なり、或  
は草野に出で或は梅林に入り、境は地に隨  
ふて變ト、路は窮まるが如くにして復た通  
ず、所謂五歩に一景十歩に一勝なるもの、  
一たび脚を園内に擧ぐれば恍として仙郷に  
入るが如く天地忽ち別にして復た塔外咫尺  
に煙塵の填塞するを覺せず。余は己に工場  
を視て其設備の壯大に驚き、園を覽て又た  
規模の廣大に驚いた。而して園の勝は亦た  
工場の光景の叙しがたきが如く、到底我が  
凡筆の勞飾し得る處で無い。唯だ一日間に  
天下第一の大工場と、天下第一の名園とを  
併せ觀た紀念として、此に梗概を附記した  
のみである。(おはり)

新編 田島學園 圖書 會



東和由大總圖書會

東和由大總圖書會



華嚴經疏

華嚴經疏







此の模刻版を祝融ノ災ニ罹リ今之存者一巻ノ一葉

一 正平本論語八解

四冊

附正平本論語札記

一冊

表裏のえ及しと常似る且御文庫とありと

巻尾

堺浦道祐居士重新命工鑄梓。正平甲午

月吉日謹誌

とありと

札記の道祐の伝ありと曰く

謹案正平申辰寔為後村上天皇正平十九年。泉  
州志載、道祐居士、是利義氏之四子、俗名祐氏、幼  
而喪父、与母共居于堺浦、遂難染為僧、改名  
道祐、初学天台、後为覚如上人之徒弟云、此古之  
刻、距今僅四五十餘年、其所印刷、流傳希  
少、好古之家、適存者少と

古刻書版の如何なる昌平一版式と漏るる

一 南宗論語

二冊

堺の河左井中、重鑄、係ん天文癸巳八月、版



テ清原宣賢の序を以て板本を傳へて其の南宗  
禪寺のありしを徳川の代より刷つて世に傳ふ  
元即其一也 南宗論法と云ふもの其の版の事  
宗を以てありしうなる云ふ

一文華軌範

官版  
嘉永元年版

三冊

韓政模刻

政式元版 五山板、似たり

卷尾に云

此書四子集所刊者、为重雕朝鮮本、相傳、謂其遵謝  
氏之舊、毫無所改、歲丙子春、子舍罹火、板亦燬、為此本

乃琳氏門人王淵濟所手訂、其視解本、不過有出入  
在元葉中、亦屬自刻、此所以今者重雕捨彼取此也

云

一既送注文中子中說

影宗本

一冊

支那人のりりり者、其本を得て、其鑑也し  
よの也 支那人とて、貴陽陳矩也

一李鳴和集

影北宗本  
貴陽陳矩のりりり、於て印刷せし  
所に係つ

一冊



純雅訪古志より傳へられたる古書四々久しく佚して亡き者  
也とありし頃也此書繁本を予東京の古肆に獲き  
鐫りぬる欲しむる者也

一文館詞林 影写本 零本 三冊

元七五卅と迄しんひととを邦に取らるるもの  
任新法左流り云

一文館詞林零本十卷 弘仁十四年鈔卷子本

見取百五十八四万五十二四万五十三四万五十九六万六十二  
六万六十四六万六十八六万九十一六万九十五六万九十九凡

十卷首題一文館詞林卷第四万五十二碑廿二万六官  
廿二次行署中書令太子賓客監修國史弘文館字  
士上柱四万陽郡開國公臣許敬善奉勅撰次行題  
將甲二載目錄界長六寸七分幅七令每行字數不整葉  
力沈通卷末記云校書殿字弘仁十四年歲次癸卯二月  
為冷然院書捺冷然院印嵯峨院印二印按唐會要云  
顯慶三年十月二日許敬宗修文館詞林一千卷上  
之見在書目舊唐志所載卷數皆因此本依跋  
文攷之弘仁中奉勅書字四之冷然院冷然院乃備御  
書處貞觀十七年罹災秘閣收花圖籍文古悉為



仄儘事見三代寶錄後以然字從火改用泉字見拾遺  
鈔引元  
 曆而四書得免災僅存者意當時從上皇在嵯峨  
 詔官故未捺冷然嵯峨二印卷散在諸處可野山所  
 藏尤多現存二十六卷憾未得盡觀之昔時傳者  
 然入宋法及我之書內有文館詞林時人不知其目以  
 信作視且誤謂皇朝人所著事見宋朝類苑知是古  
 在宋初已失傳則雖零卷殘軸所存不多實可寶  
 重矣文化中述方林君得此書零本收族佚存葉者  
 中近日孫星衍續古文苑既元四庫未收書提要皆  
 援引之則已播西土但其所傳僅四卷不及其傳是

二可憾耳梅弘仁十四年唐穆宗之長慶三年貞觀十七  
年唐僖宗之乾符二年也

一 新編大易断例ト筮元龜 朝鮮一冊

美山安院花古」の印あり  
 即ち本曲無漸長安院の山房なりと  
 知る看安院之朝鮮の没後に  
この本抄をのりて其の  
新編大易断例をのりて其の  
 糸に次ぐ抄々々新考と其内の事  
 々々々々、表紙の「抄秘」の印を捺す



古

一 韻古

古言 朝輝

大平

一 冊

卷之安 漢書 古 印

一 孝經直解

古 一 冊

或名高字 魏之劉炫所作也

原自是初又存于古之古

漢杜林古 印



東和由大學圖書印

東和由大學圖書印



馬和日大學圖書館

馬和日大學圖書館







此之角口より採つた古史字の石大切なる材料と謂ふべし

11) 原板選擇集

12) 貞和二年大般差紙

13) 嘉祿二年阿彌陀紙

14) 嘉祿二年芳川品

15) 嘉祿三年金剛壽命陀羅尼紙

16) 弘安二年大日經疏

17) 弘安二年法華經三大部

18) 弘安十年傳法正宗記

19) 正安四年佛法未目錄

110) 正安四年觀心曼壽陀

111) 正和二年正堂新添

112) 正和元年詩人玉屑

113) 嘉曆三年園悟紙

114) 嘉曆四年依海紙

115) 曆三年首楞嚴藏紙

116) 曆四年園悟紙

117) 貞和二年宮内紙

118) 貞和三年雪峯外集

119) 貞和四年皇徳傳紙

古史の字の石の採りては、其の志とて、けいも高のコンと、在る集を心うけ、其の志とて、古史の字の石の採りては、其の志とて、けいも高のコンと、在る集を心うけ、其の志とて、

余好古刻本每觸目者或影鈔或購求而收于篋中積年殆堆偶披閱之刻時前後甚方于考索因彙古刻以鈔出題跋便乎急求時藤正富氏有摺本致余所影鈔可副之以行也即相共討論編纂漸定然而如古跋可以為古刻之左者拙手傳字必誤多矣因姑刻此者以示同好



亦如遺書採殘篇之術也荒有此陀古刻本在則詳垂教道  
須補入

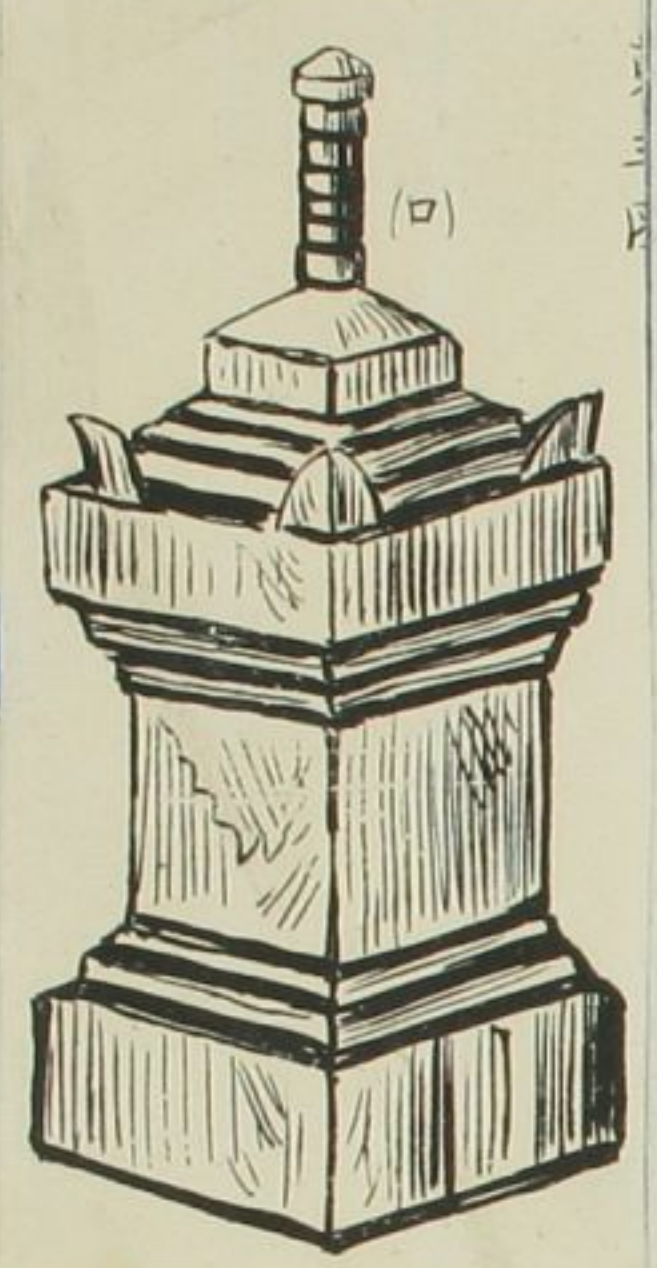
凡刻本之最早者寶龜勅札相輪陀羅尼也致續紀勅札  
初係天平寶字八年則本唐肅宗德二年先于柳玳馮道  
荒于年其陀羅尼今猶存且未聞唐時刻本存不登  
珍乎故摹刻以冠收平卷首

貝原氏以選擇集為刻本始按選擇集成在連久九年  
山門清燒印板者元久三年也北隆僅九年其後建曆  
辛未冬平基親序以刊行然則建曆非連久不也  
十四年蓋原板燒失再刊也輪池先生藏古粘葉葉

擇集其序審定善原板也雖年祀可徵在共刻在  
元久前則余所喜自者莫出于此也

元後錄出刻于題名及寺院事以備乃於今若  
刪去是摺本考畫之也

文政己卯歲夏潤三月上旬源氏充藏于  
御柳園柳奈



○寶龜御旨のる系路の一とて傳へくくも叔塔と云ふ  
よと稱ひてあるものかあるか  
くも系路と云ふも六とく久張杉  
杖と心と九冬雨胡粉を以て



塗るんをさしひびき、其居居の中央へ上方向の円筒  
 状の孔を穿つと、其のさき丸い公径の丸四分、  
 せんを何枚の孔へ解を得、さうなぐ、このほ  
 けは、せんを板を入る、めめ、の孔へ板塔とさふ、  
 せんへ起つたのむき、さうなぐ、さうなぐの板を入る、  
 うと、さうなぐの字と各個、さうなぐへ、せんをたの  
 せんをへ、さうなぐ、さうなぐ、さうなぐ、さうなぐ







東京帝國大學  
附屬圖書館藏本  
第二回展覽會目錄

早稻田大學圖書館



早稲田大學圖書館

本展覽會ニ陳列ノ圖書ハ主トシテ最近十年間ニ本館ニ收容セル者ノ中ヨリ選擇セリ但シ明治三十二年五月第一回展覽會ニ陳列ノモノヲ除却セズ又龜井伯爵家寄托ノ該文庫本ヨリモ採レリ  
古書ノ保存ヲ旨トセザル我ガ圖書館ニ在リテハ架藏ノ圖書概ネ普通有用ノ者ニ屬シ其刊寫年代ノ新古等ニ至リテハ必ズシモ之ヲ論ゼザルナリ然レドモ本展覽會ニ於ケルガ如ク觀覽ノ時間陳列ノ場所俱ニ限リアル場合ニ於テ公衆ノ過眼ニ適スル圖書ハ普通本ヨリモ寧ロ多少稀觀ノ性質ヲ帶ブル者ナランコトヲ要ス依リテ陳列圖書ハ藏本中ニ就キテ多ク古書其他流布少キ分ヲ擇ビタリ抑々古書類ハ骨董的趣味ヲ有スル外學者ニ裨益スル所無シト惟フベカラズ之ヲ利用スル人ニ取リテハ其價值遙ニ普通本ノ上ニ在リ是レ稀觀書類ガ孰レノ文庫ニ於テモ重要ノ位地ヲ占ムル所以ナリ若シ夫レ本館所藏一般圖書ニ關スル概念ハ別ニ本館書目及ビ書庫ニ就キテ之ヲ知ラレンコトヲ冀フト云爾

明治三十八年二月二十三日

### 東京帝國大學附屬圖書館藏本 第二回展覽會

#### 目錄

##### 第一部 和漢書

###### 第一類 文書

賣買券 <small>實德五年十一月二十三日 備前國津高郡菟垣村</small>	一通	蓮性寄進狀 <small>元應二年十一月二十一日</small>	一通
賣買券 <small>弘仁十年二月十六日 近江國坂田郡大原郷</small>	一通	鎌倉時代女房消息	一三十一卷
觀世音寺注進狀 <small>保延三年三月</small>	一卷	西大寺古圖 <small>鎌倉時代、室町時代、徳川時代</small>	三鋪
觀世音寺談義緣起案文	一卷	壽寧院所領ニ關スル足利將軍ノ御教書 <small>應永七年、同二十年、永享四年 長祿二年、文明十年</small>	五通一卷
岡本寺田券紛失狀 <small>仁安二年五月二十三日 相慶大法師判</small>	一通	粉河寺文書 <small>應永年中</small>	三通 合一卷
七條院應下文 <small>貞應三年正月</small>	一通	三聖寺文書 <small>元龜至天文年中</small>	六通
東大寺三綱等奏請文 <small>安元元年十月權部 維那法師嚴真等判</small>	一通	兵庫北關入船納帳 <small>文安二年正月二月</small>	一冊
東大寺并東寺狀狀 <small>建久七年七月六日書寫 弘安十一年、永仁四年</small>	一卷	春日社御八講季頭日記 <small>天文二十三年 快筆</small>	一冊
延慶二年、文保二年中具註曆 <small>狩谷棧齋藏</small>	一卷	足利尊氏ノ文書 <small>建武二年八月</small>	一通
斑島文書 <small>文保二年至康應元年</small>	二四十一卷	足利義詮ノ文書 <small>貞治六年四月五日</small>	一通
		足利義滿ノ文書 <small>五月二十八日</small>	一通
		高師冬ノ文書 <small>曆應四年閏四月二日</small>	一通
		足利直義ノ文書 <small>建武五年二月十五日</small>	一通
		石川兼光ノ軍忠狀 <small>文和二年五月</small>	一通



足利持氏ノ文書應永三十一年六月十三日 一通  
 上杉憲實ノ文書應永三十一年六月十三日 二通  
 細川勝元ノ文書四月四日 一通  
 伊勢貞親ノ文書四月四日 一通  
 北條氏康ノ文書三月二十日 一通  
 太田資政ノ文書四月十二日 一通  
 佐竹義重ノ文書二月二十四日 一通  
 上杉謙信ノ文書三月十五日 一通  
 織田信長ノ文書十一月二十八日 一通  
 豊臣秀吉ノ文書天正十三年十一月二十一日 一通  
 徳川家康ノ文書天正十一年四月十九日 一通  
 戰國時代ノ誓紙長祿、天文、永祿、天正等 十二通  
 奈良町井寺社方御法度書留帳寛永十五年 三冊  
 奈良町奉行公事裁許帳元祿十七年 三冊  
 正徳三年宗門帳美濃國厚見郡 一冊  
 朝鮮嘉慶二十一年魚川道各驛奴婢丙子 一冊  
 式年續案 一冊  
 刑所事目朝鮮原本 一冊

元和年中日本耶蘇教徒ヨリ羅馬法王廳  
 ニ贈リタル文書寫眞 六通  
 西藏國上奏文 一通  
 廓爾喀王上奏文 一通  
 第二類 經卷  
 善見毘婆沙律卷第六天平十二年光明皇后願經 一卷  
 大方廣佛華嚴經入法界品卷第十四古寫 一卷  
 菩薩瓔珞本業經集衆品古寫 一卷  
 法華集驗記下卷 嘉應二年二月十八日 一卷  
 維摩羅詰經入文疏卷第十四古寫 一卷  
 蘇悉地羯羅經略疏卷第七延久二年三月六日 一卷  
 說有一切有部俱舍論卷第三保延元年八月十七日 一卷  
 大集大虛空藏所問經卷第一長治元年四月十三日 一卷  
 大般若波羅蜜多經卷第二百六十古寫 一卷  
 大般若波羅蜜多經卷第三十一古寫 一卷  
 大智度論卷第三十一性圓筆 一卷  
 大般若波羅蜜多經卷第四百七十七定寛校(東大) 一卷  
 大隨求陀羅尼古寫 一卷

具書古寫 十一面觀世音ニ關スル諸經文ノ註疏 一卷  
 大般若波羅蜜多經卷第一百一十四嘉應三年二月一日書寫 一帖  
 諸師印信承久元年七月二十七日書寫 一卷  
 諸寺略記貞和二年五月書寫 一卷  
 瑜伽師地論卷第八古寫 一卷  
 百萬塔所收陀羅尼三種 三卷  
 成唯識論卷第九版本 一卷  
 四分戒本元亨二年版 一帖  
 三部經元亨二年版 四帖  
 經卒塔婆古寫 二十枚  
 古代經籤 二枚  
 西藏文大藏經寫本及版本 三百五十四卷  
 第三類 寫本  
 延喜式卷第十三古寫 一冊  
 延喜式卷第九、十、十三古寫 三冊  
 源氏物語拔書藤原爲氏筆 三帖  
 簾中抄古寫 二卷一冊  
 日本皇帝系圖南北朝頭書寫、永祿中書寫 一卷

源氏物語抄出永和二年十二月十八日觀意筆 二冊  
 赤染右衛門家集傳小倉實名筆 一冊  
 論語集解 應永二十二年二月十二日書寫 五冊  
 亞槐集明應元年十一月月中旬飛鳥井雅俊筆 二冊  
 古文眞寶明應元年書寫 二十卷六冊  
 初學和歌抄永享十年書寫 一冊  
 善導御書抄寬正三年、弘治元年、慶長二年書寫 十三卷五冊  
 史記抄扁鵲倉公第四十五 一冊  
 蒲室集疏文明九年八月書寫 一冊  
 幼兒乳臭編古寫 一冊  
 物初贖語古寫 二十五卷六冊  
 涪備詩古寫 二十卷十冊  
 帳中香大永七年至享祿四年大甫筆 二十冊  
 神道集享祿四年至天文二年信譽筆 十卷三冊  
 菩薩戒本宗要享祿四年五月下旬一白筆 一冊  
 七五抄天文三年六月十九日見了ノ奥書アリ 五冊  
 日本書聖德太子傳曆天文四年九月書寫 二冊  
 大學抄天文六年十二月二十四日書寫 一冊



早稲田大學圖書館

詞顯抄	天文二十四年六月九日高屋但馬守康尙筆	一冊
十八章反音私抄	永祿八年六月全祥筆	一冊
老のすさみ	永祿九年後八月下旬書寫 (甲斐二宮舊藏)	一冊
伊勢物語聞書	天正八年閏三月覺權筆	一冊
紹巴獨吟千句注	天正二十年六月十五日書寫	一冊
源氏物語休開抄	天正十四年十月二十四日書寫	十七冊
三帖源氏慶長四年五月七日佐野肥後守筆		五冊
源氏物語紹巴抄	慶長十二年意運筆	五十四帖二十冊
源氏物語古寫	元和九年中院通村校合	五十四帖
三寶院傳法水丁開書	天正十八年十二月二十三日	三冊
職原鈔	天正八年三月十五日尊惠筆、末端數葉 連水房常補寫、溫古堂及芳宜園舊藏	二卷一冊
職原抄註解	文祿五年九月書寫	一冊
職原抄	慶長六年十二月二十日實雄筆	二冊
韻鏡看拔抄	寬永元年十一月二十日宗寬筆	二冊
興福寺三綱補任寬	永二十一年二月永舞筆	一冊
弘安禮節異本	古寫	十二卷一冊
公事方御定書原本		二冊
科條類典原本		十四冊
柳翁筆記		二冊
歌舞伎始原	天保十四年堀山律保自筆	一帖
新撰字鏡摹寫		十二冊
類聚名義抄摹寫		十一冊
燃藜室記述	韓人筆寫	四十冊
高麗史		七十冊
朝鮮國志	韓人筆寫	四冊
李相國日記		四冊
漁樵問答	韓人筆寫	一冊
稀觀新寫本集		八部百四冊
第四類 版本		
往生要集	承元四年版 (日本版本)	三卷六帖
密庵禪師語錄	正應元年版 (相國寺舊藏)	二卷一冊
來々禪子集	元弘元年版	一冊
靈源和尚筆語	曆應五年版	一冊
古林和尚偈頌拾遺	康永四年版	一冊
禪林類聚	貞治六年版	二十卷二十冊

虎丘隆和尚語錄	貞治七年版	一冊
南堂禪師語錄	應安元年版	二卷四冊
應庵和尚語錄	應安三年版	三冊
破庵錄	應安三年版	一冊
開福寧和尚語錄	應安六年版	一冊
楞嚴經會解	康應二年版 (相國寺舊藏)	十卷十冊
竺儂錄	古版 (相國寺舊藏)	四冊
雪峯空和尚外集	古版	一冊
釋氏要覽	古版 (山田以文舊藏)	三卷一冊
王狀元集	東坡先生詩 (古版 向山黃郵舊藏)	二十五卷十三冊
百家註分類		十二卷二冊
皇元風雅	古版 (香山寺舊藏)	一冊
北澗和尚語錄	古版	一冊
獨庵外集續藁	古版	五卷一冊
兀庵錄	古版	一冊
松源和尚語錄	古版 (相國寺舊藏)	二卷二冊
僧寶正續傳	古版	七卷一冊
枯崖和尚漫錄	古版	三卷一冊
雲谷和尚語錄	古版	一冊
石谿錄	古版	一冊
興禪記	古版	一冊
韻府群玉	古版	二十卷二十冊
韻鏡享祿元年版		一冊
貞永式目	享祿二年版	一冊
南宗論語	天文版後刷本	十卷二冊
節用集	天正十八年版	二冊
節用集易林本	慶長二年版	二卷一冊
節用集饒頭屋本	慶長版	一冊
孔子家語	慶長四年版	四冊
大廣益會玉篇	慶長九年版	三十卷二冊
玉篇	慶長十年版	三卷五冊
增補六臣註文選	慶長十二年活版 (函崎文庫舊藏)	六十卷二十冊
伊勢物語	慶長十三年版	二冊
倭玉篇	慶長十五年版	三冊
日本書紀	慶長十五年活版、元和中加點 山田以文校	三十卷十五冊
古文眞寶後集	慶長十九年版	十卷二冊
古文眞寶後集	古活版 (丹鶴書院舊藏)	十卷三冊



史記古活版

禮記(鄭註 古活版)

新編排韻增廣事類氏族大全(元和五年活版)

皇朝類苑(元和七年活版 後水尾天皇勅版)

春秋左氏傳(集解 古活版 山科賴言校)

新刊鶴林玉露(古活版)

撰集抄(古活版 光悅本)

七人びくに(寬永十二年版)

金平本集大形本(明曆至延寶年中版)

金平本集小形本(萬治至享保年中版)

黃表紙集

乙 支那版本

付法藏因緣經卷第四(宋崇寧版)

瑜伽師地論卷第五十三(三聖寺舊藏)

宗鏡錄卷第八十二(宋版)

大方廣佛華嚴經疏卷第一百七(宋版 建長二年五月二日 喜海集 高山寺舊藏)

梵網經菩薩式(宋版 石清水神宮寺舊藏)

百三十卷五十册

二十卷十册

十卷十册

七十八卷十五册

三十卷八册

十八卷六册

三册

三卷一册

五十五册

三十九册

八十七卷十五册

一帖

一帖

一帖

一帖

一帖

雲庵禪師語錄(宋崇寧版)

班馬字類(宋淳熙版本覆刊)

前漢書(元大德九年版 明成化十六年補刻)

古樂府(元至正六年版)

大廣益會玉篇(元至正二十六年版)

荀子(元版)

新編事文類聚翰墨全集(元版?)

唐文粹(元末明初版)

太子蘇平仲文集(明初版)

元豐類稿(明初版)

歷代君鑒(明景泰四年版)

大唐六典(明嘉靖二十三年版)

少微通鑑(明嘉靖三十八年版)

東西洋考(明萬曆版)

欽定古今圖書集成(清雍正三年活版)

大學衍義(宣德九年活版)

龍龕手鑑

三卷三册

五卷五册

三十七册

十卷四册

三十卷三册

二十卷五册

百卷十二册

十六卷三册

十七卷二册

五十卷十册

三十卷八册

二十卷十册

十二卷四册

六百帙

五十函九千九百九十五册

四十三卷十五册

八册

丙 朝鮮版本

小學集說

小學集註

孟子諺解

大典通編(乾隆五十年版)

大典會通(同治四年版)

東國文獻備考

麗史提綱(康熙版)

谿谷集

退溪集

李忠武公全書(活版)

一峯集

一松先生文集

雲石遺稿

江漢集

圭齋遺藁

水村集

東州先生集

四册

五册

二册

七册

六卷五册

六卷六册

四十册

二十三卷二十册

三十四卷十六册

三十四册

十五卷八册

七册

四册

十册

十五册

三册

六册

十三册

柏潭先生文集

東浦遺稿

古詩選

唐詩始音

昭代風謠

全韻玉篇

朝鮮詩韻

朱子實紀

四部手罔

東醫寶鑑

第五類

連歌新式(西三條實隆筆)

梁塵愚案抄(山科言繼筆)

伊勢物語(近衛信尹筆)

相摸集(飛鳥井雅章筆)

源氏物語(三室戶誠光筆)

續神皇正統記(松下見林筆)

考證漫抄(柳原重洲自筆)

名家手澤本

六册

四册

三册

一册

二册

二册

一册

五册

十二册

二十五册

一册

二卷一册

一册

一册

一册

五十四帖

一册



○續萬葉論賀茂置淵自筆	七冊	一枝堂全書村田了阿筆	八十四冊
○朗詠要集上卷 藤井貞幹筆	一冊	一枝堂抄録村田了阿筆	二百六十二冊
○楓の落葉荒木田久老自筆	二冊	松屋叢書小山田興清自筆	百四冊
○播磨日記荒木田久老自筆	一冊	松屋筆記小山田興清自筆	九十冊
○浦づたひの日記伴蒿蹊自筆	一冊	大盡舞考證岩瀬京傳自筆	一冊
○北山漫抄山本北山筆	二十五冊	茂睡考岩瀬京山自筆	一冊
○香取日記橋千隆自筆	一冊	耽奇漫録 <small>瀧澤馬琴自筆</small>	二冊
○やまとぶみわさうた橋千隆筆	一冊	六國史類聚稿本 <small>龜峯戊申自筆</small>	六十八冊
○音羽の山路富士谷御杖自筆	一卷	國史拾遺 <small>内藤廣前自筆</small>	十二冊
○百瀬川大田南畝自筆	三十三冊	拾遺愚草 <small>中院通茂校</small>	三冊
○夢の憂橋大田南畝、石川雅望自筆	一冊	拾芥抄 <small>藤井貞幹及山田以文校</small>	三卷六冊
○源語參註尾崎雅嘉自筆	十五冊	續日本後紀荒木田久老校	二十卷十冊
○ねさめのすさび石川雅望自筆	二卷一冊	落窪物語伴蒿蹊校	四冊
○本朝度量權衡考狩谷棧齋自筆	一冊	堀河後度百首 <small>岡田真澄校</small>	一冊
○好書故事附錄卷二上 <small>近藤守重自筆</small>	一冊	醒睡笑 <small>巽本 高屋種彦校</small>	八冊
○佛事考立原任自筆	十八冊	諸國盆踊唱歌 <small>高屋種彦校</small>	一冊
○公家衆參向便 <small>松岡辰方自筆</small>	一冊	周易 <small>龜田緯瀨校</small>	十卷二冊
○輪池叢書 <small>屋代弘賢筆</small>	八冊	毛詩鄭箋 <small>龜田緯瀨校</small>	二十卷五冊

第六類 繪畫

○朝賀ノ圖 <small>摹本</small>	二冊	七十一番職人歌合 <small>中川政直畫</small>	四卷
○信貴山緣起 <small>摹本</small>	一幅	關ヶ原合戰圖 <small>文化八年菅原洞齋畫</small>	二卷
○一遍聖繪詞 <small>六條道場 摹本</small>	三卷	元祿頃江戶風俗繪卷 <small>殘闕</small>	一卷
○竹崎五郎繪詞 <small>摹本</small>	十二卷	日光御祭禮行列繪卷 <small>清橋眞信畫</small>	二卷
○竹崎五郎繪詞 <small>摹本(拔寫)</small>	二卷	江戶市井年中風俗圖 <small>天保二年橋本晴園畫</small>	一卷
○後三年合戰繪詞 <small>摹本</small>	一卷	○近世名家肖像 <small>摹本</small>	一卷
○西行物語繪 <small>摹本</small>	一卷	○近賀茂祭圖 <small>原在明畫</small>	九鋪
○道成寺繪詞 <small>摹本</small>	四卷	○大内裏圖 <small>内藤廣前自筆</small>	一帖
○繪師草子 <small>山名貫義摹寫</small>	三卷	○徳川家年中行事圖 <small>井關某畫</small>	一帖
○福富草紙 <small>古摹本</small>	一卷	○梅園草木花譜 <small>秋部五毛利元壽寫生</small>	二卷
○やまひの草紙 <small>山名貫義摹寫</small>	一卷	○舞樂圖	二卷
○酒顛童子繪詞 <small>享保八年梶川周益摹寫</small>	四卷	○日光山輪王寺五層塔圖	一幅
○古畫摹本 <small>山名貫義摹寫</small>	十卷	○日光山大廟圖	二卷
○大織冠	三卷	○東大寺三倉寶器圖	十卷
○善光寺如來記	六冊	○東國地圖 <small>朝鮮人手寫</small>	一帖
		○書伊勢物語 <small>葵川師宣畫</small>	二卷一冊
		○頭次 <small>のあそび 葵川師宣畫</small>	一冊
		○姿繪百人一首 <small>葵川師宣畫</small>	三冊

早稲田大學圖書館



若草原氏奧村政信畫 版本 十一冊  
 若草物語奧村政信畫 版本 二卷一冊  
 百人女郎品定西川祐信畫 版本 一冊  
 江戸十二月月圖歌川豐廣畫 版本 一帖  
 東海道五十三次圖一立齋廣重畫 版本 一帖

第七類 搨本

石臺孝經 五幅  
 景教流行中國碑頌 一幅  
 金石搨本雜卷(尙古齋舊藏) 三卷  
 五經文字(狩谷棧齋舊藏) 三帖  
 九經字樣(狩谷棧齋舊藏) 一帖  
 唐石經尙書 十三卷  
 玄秘塔碑 一帖  
 夢英篆書千字文 一帖  
 絳帖(元璋球王家舊藏) 五帖  
 蔡帖(長梅外舊藏) 二帖  
 五朝法帖 五帖

古瓦搨本 二帖  
 古瓦譜藤井貞幹輯并自筆序 一冊  
 鎌倉奇賞古瓦譜 一冊  
 公私古印譜藤井貞幹輯并自筆序 一帖  
 印譜無題號 九冊  
 壯夫彫蟲今中以禮篆 十五冊  
 印香閣印譜清趙錫綬等篆 二十冊  
 書中屋印稿清汪大基篆 四冊  
 既琢齋印譜清王恩重篆并自筆序 四冊

第八類 雜

手鑑 一帖  
 橘枝直歌稿 一卷  
 橘枝直歌文雜稿 一卷  
 橘千蔭歌稿 一卷  
 橘千蔭文稿 一卷  
 芳宜園往復書翰集 二卷  
 耳比磨利帖 四帖

Francia Duke of Lothar  
 Selen (Mexico Picture Man)

阿叉羅帖 五帖  
 富興行場所附及富札 一冊  
 佛蘭納札雜綴(內藤櫻嶽輯) 十九冊  
 大和國御陵墓及官幣社寫真 五十五枚  
 東京大學構內寫真 十二枚  
 國學家肖像寫真 八枚

第二部 洋書

第一類 古版洋書

甲 西曆一千五百年代刊行書類  
 Theodosius II, *Emperor of the East*. Codicis  
 Theodosiani libri XVI. Basilee. 1528.  
 Magna Charta. The great charter called in latyn  
 magna carta. Lond. 1534.  
 Spiegel, I. Lexicon iuris civilis. Argentorati. 1541.  
 Diversi. Avisi particolari dall' Indie di Portogallo,  
 recenuti, dall' anno 1551. Sino al 1558.  
 [Venice. 1560.]  
 Guicciardini, F. F. G... Historiarum svi tem-  
 poris libri viginti, ex Italico in Latinam ser-

monem nunc primum & conversi & editi.  
 Basilee. 1566.

Concilliorum omnium, tum generalium, tum  
 provincialium. Coloniae Agrippinae. 1567. 4v.

Epistolae Indicae et Iaponicae de miltarum gen-  
 tium ad Christi fidem, per Societatem Iesu  
 conversione. 3. ed. Louanii. 1570.

Acosta, E. Rerum a societate Iesv in oriente  
 gestarum ad annum usque 1568... Accessere  
 de Iaponicis rebus epistolarum libri III, ...  
 Dilingae. 1571.

Dobereiner, P. Senttschreyben vnd wahrhafte  
 zeytungen. Von auffgang vnd erweiterung des  
 Christenthums bey den Haydeninn der newen  
 welt. [Mün.] 1571.

Acosta, E. Emanvelis A. Lvsitani historia rerum  
 a Societat Iesv in Oriete Gestarum, ... Par.  
 1572.

Tiragvellos, A. Andree Tiragvelli comentarii.  
 De nobilitate et ivre primigeniorum. Lvgdvni.  
 1573.

Rerum a Societate Iesv in Oriente gestarum  
 volumina... Coloniae 1574.

Brutus, S. I. Vindiciae, contra tyrannos. Edim-  
 burgi. 1579.



**Alciatus, A. D.** *Andreae Alciati Mediolanensis ivreos: opera omnia.* Basileæ. 1582. 2v.  
**Ramvisio, G. B.** *Delle navigazioni et viaggi.* Venetia. 1583-88. 3v.  
**Acta** consistorii pvblice exhibiti a S. D. N. Gregorio Papa XIII. regum Japoniorum legatis Romæ, die XXIII. Martii M. D. LXXXV. Romæ. 1585.  
**Historischer Bericht** was sich nechst vorscheine Jar 1577. 79. 80. vnnnd 81. in Bekœhung der gewaltigen Landschaft vnd Insel Jappon. Delingen. 1585.  
**Mozzius, P. N.** *Tractatus de contractibus.* Coloniae. Agrippinae. 1585.  
**Modius, F.** *Pandectæ triumphales.* Francofurti ad Moenum. 1586.  
**Gualtieri, G.** *Relazioni della Veneta degli ambasciatori Giaponesi a Roma sino alla partita di Lisbona.* Roma. 1586.  
**Virgilius Maro, P.** *Pvb. Vergilii Maronis opera, quæ quidem extant, omnia.* Basileæ. 1586.  
**Nvovi avvisi del Giappone con alcovi altri della Cina del LXXXIII. et LXXXIV. Cauati dalle lettere della Compagnia di Giesv. Venetia. 1586.  
**Lactantius, L. C.** *Diinam institutio.* Lugdun. 1587.**

**Schutzfleisch, C. S.** *Comradi Samvelis Schutz-Hetschii Opera historica politica.* Berolini. 1590. ad Moenum. 1594.  
**Hoeschellius, D.** *Hieroglyphica horapollinis.* Augustæ Vindelicorum. 1595.  
**Duaren, F. D.** *Francisci Dvareuii. C. Celeberrimi, omnia quæ quidem hæctenus edita svervnt opera.* Francofurti. 1598.  
**Jesvs.** *Cartas qvæ os padras e irmãos da Companhia de Jesus escrevenão dos Reynos de Japão & China...* Enora. 1598. 2v.  
**Hakluyt, R.** *The principal Navigations, voyages, traffiqves, and discoveries of the English nation made by sea or over-land...* Vol. 1, 2. Lond. 1598-99. 2v. (in 1.)  
 乙 英國發行古新聞紙摸刻 六種  
 The English mercurie. No. 50. Jul. 23, 1588.  
 The Weekly news. No. 19. Jan. 31, 1606.  
 The Intelligencer. No. 288. Jan. 29. — Feb. 5, 1648.  
 The Gazette. No. 432. Sept. 2. — 9., 1658.  
 The News. No. 52. Jul. 6., 1665.  
 The London gazette. Sept. 3. — 10., 1666.

丙 西曆一千六百年代刊行書類 二十七部  
 一、古代法律書 四十部  
 二、日本支那及印度ニ關スル 四十部  
 三、日本ニ於ケル「キリシタン」 四十部  
 四、日本ニ於ケル「キリシタン」 四十部  
 五、日本ニ於ケル「キリシタン」 四十部  
 六、日本ニ於ケル「キリシタン」 四十部  
 七、日本ニ於ケル「キリシタン」 四十部  
 八、日本ニ於ケル「キリシタン」 四十部  
 九、日本ニ於ケル「キリシタン」 四十部  
 十、日本ニ於ケル「キリシタン」 四十部  
 十一、日本ニ於ケル「キリシタン」 四十部  
 十二、日本ニ於ケル「キリシタン」 四十部  
 十三、日本ニ於ケル「キリシタン」 四十部  
 十四、日本ニ於ケル「キリシタン」 四十部  
 十五、日本ニ於ケル「キリシタン」 四十部  
 十六、日本ニ於ケル「キリシタン」 四十部  
 十七、日本ニ於ケル「キリシタン」 四十部  
 十八、日本ニ於ケル「キリシタン」 四十部  
 十九、日本ニ於ケル「キリシタン」 四十部  
 二十、日本ニ於ケル「キリシタン」 四十部  
 二十一、日本ニ於ケル「キリシタン」 四十部  
 二十二、日本ニ於ケル「キリシタン」 四十部  
 二十三、日本ニ於ケル「キリシタン」 四十部  
 二十四、日本ニ於ケル「キリシタン」 四十部  
 二十五、日本ニ於ケル「キリシタン」 四十部  
 二十六、日本ニ於ケル「キリシタン」 四十部  
 二十七、日本ニ於ケル「キリシタン」 四十部  
 二十八、日本ニ於ケル「キリシタン」 四十部  
 二十九、日本ニ於ケル「キリシタン」 四十部  
 三十、日本ニ於ケル「キリシタン」 四十部  
 三十一、日本ニ於ケル「キリシタン」 四十部  
 三十二、日本ニ於ケル「キリシタン」 四十部  
 三十三、日本ニ於ケル「キリシタン」 四十部  
 三十四、日本ニ於ケル「キリシタン」 四十部  
 三十五、日本ニ於ケル「キリシタン」 四十部  
 三十六、日本ニ於ケル「キリシタン」 四十部  
 三十七、日本ニ於ケル「キリシタン」 四十部  
 三十八、日本ニ於ケル「キリシタン」 四十部  
 三十九、日本ニ於ケル「キリシタン」 四十部  
 四十、日本ニ於ケル「キリシタン」 四十部  
 甲、日本ニ關スル書類 (本館所藏ノ内一小部分ヲ除キテ) 一、支那及朝鮮ニ關スル書類 (全上)  
 乙、支那及朝鮮ニ關スル書類 (全上)  
 丙、稀觀書及美術書類  
**Silvestre, J. B.** *Palaeographical album of facsimiles of writings of all nations and periods.* Lond. & Par. 1850.  
**Amira, K. von** *Die Dresdener Bilderhandschrift des Sachsenspiegels.* Leip. 1902. 2v.  
**A collection** of the ancient Mexican picture-manuscripts.  
**Lentze.** *Die im Baue begriffenen Brücken über die Weichsel bei Dirschau und über die Nogat bei Marienburg.* Ber. 1855.  
**Guignes, de.** *Dictionnaire chinois, français et latin.* Par. 1813.

**The Triptikaka.** (*In Siamese.*) 39 v.  
**Ansichten aus Japan, China und Siam.** Ber. 1864.  
**Lepsius, C. R.** *Denkmäler aus Aegypten und Aethiopien.* Ber. 12 v.  
**Texier, C. & Pullan, R. P.** *The principal ruins of Asia Minor.* Lond. 1865.  
**Racinet, A.** *Le costume historique.* Par. 1888. 21 v.  
**Mercuri, P.** *Costumes historiques des XII<sup>e</sup>, XIII<sup>e</sup>, XIV<sup>e</sup>, et XV<sup>e</sup> siècles.* Nouv. éd. Par. 1860-61. 3 v.  
**Lechevallier-Chevignard, E. & Duplessis, G.** *Costumes historiques des XVI<sup>e</sup>, XVII<sup>e</sup>, et XVIII<sup>e</sup> siècles.* Par. 1867. 2 v.  
**Gibb, W. & Holmes, R. R.** *Naval and military trophies, and personal relics of British heroes.* Lond. 1896.  
**Jubinal, A.** *La Armeria Real de Madrid.* Par. 1842-54. 5 v.  
**Meyrich, Sir S. R.** *Ancient armour.* 2. ed. Lond. 1842-54. 5 v.  
**Waring, J. B.** *Masterpieces of industrial art and sculpture at the International Exhibition, 1862.* Lond. 1863. 3 v.  
**Bartolini, L., &c.** *Imperiale e Reale Galleria di*



- Firenze. Illustrata da F. Ranalli. Firenze. 1841-46. 4 v.
- Vacher, S.** Fifteenth century Italian ornament. Lond. 1886.
- Dolmetsch, H.** The historic styles of ornament. Lond. 1898.
- Fischbach, F.** Ornamente der Gewebe. Hanau. 1882.
- Gerlach, M., ed.** Allegorien und Embleme. Wien. 1882. 2 v.
- Williamson, E.** Les meubles d'art du mobilier national. Par. 2 v.
- Havard, H.** Dictionnaire de l'ameublement et de la décoration. Par. 4 v. (in 5.)
- Amé, E.** Carrelages émaillés du moyen-âge et de la renaissance. Par. 1859.
- Ongania, F.** La basilica di San Marco in Venezia. Venezia. 1881. 2 v.
- Dettagli del pavimento ed ornamenti in mosaico della basilica di San Marco in Venezia.** Venezia. 1881.
- Dettagli di altari, monumenti, scultura ecc. della basilica di San Marco in Venezia.** Venezia. 1881-85. 8 v.
- Gruner, L.** Fresco decorations and stuccoes of churches and palaces in Italy during the fifteenth & sixteenth centuries. New.ed. Lond. 1854.
- Wilmowsky, D. von.** Die römische Villa zu Nennig und ihr Mosaik. Bonn. 1865.
- Sauvageot, C.** Palais, chateaux, hôtels et maisons de France du XV<sup>e</sup> au XVIII<sup>e</sup> siècle. Par. 1867. 4 v.
- Jones, J., &c.** London churches of the XVII<sup>th</sup> and XVIII<sup>th</sup> centuries. Lond. 1896.
- Architektonisches Skizzenbuch.** 8 v.
- Valentini, A.** La patriarcale basilica vaticana. Roma. 1845-55. 2 v.
- Goury, J. & Jones, O.** Plans, elevations, sections, and details of the Alhambra. Lond. 1842. 2 v. (in 1.)
- Sachs, E. O.** Modern opera houses and theatres. Lond. 1896-98. 3 v.



明治三十八年  
一月下澣

春城閑人